

8 下甌村の哺乳類相

(1) はじめに

下甌村は甌列島の南端に位置し、細長い村の中央部を山脈が走り、海岸線はほとんど険しい断崖となっている。山地には良く整備された林道が縦横にめぐらされており、集落は乏しい平地に集中している。

哺乳類の調査は1994年10月4日から6日までの3日間行ったのでその概要を報告する。

(2) 調査方法

実際に山野を歩いて動物の足跡や糞などフィールドサインを探す踏査法や地元の動物に詳しい人から情報を得る聞き取り法、ネズミやモグラ類をトラップで捕まえる捕獲法、夜間は林道を車で走りながら出現した動物を観察するロードセンサス法などを行った。

(3) 共同調査者

大塚閏一（鹿児島大学名誉教授）石堂昭憲（鹿児島市立平川動物公園）

(4) 調査結果

食虫目 INSECTIVORA

モグラ科 TALPIDAE

モグラ *Mogera wogura*

田畑や牧場などいたるところにモグラ塚やトンネルがみられたので生息数はかなり多いと思われた。

畑に小型バケツを使ったピットホール・トラップを設置したが残念ながら捕獲は出来なかった。

トガリネズミ科 SORICIDAE

ジネズミ *Crocidura dsinezumi*

手打の橋口義達氏によると家の中や周辺に小さなネズミが沢山いるという。

後日（10月14日）橋口氏から飼いネコが捕らえたというネズミを送って頂いた。

標本は少し腐敗していたが、細長くとがった口、ピロード状の柔らかい毛などトガリネズミ科の特徴をしており、生息地、白い歯、大きさ等からジネズミ属のジネズミと思われる。

体重 3.1g, 頭胴長50mm, 尾長35mm, 後足長11mm。(写真1)

翼手目 CHIROPTERA

キクガシラコウモリ科 RHINOLOPHIDAE

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*

溝口文男氏から1987年9月13日に捕獲されたキクガシラコウモリの写真が寄せられた。場所は航空自衛隊基地から尾岳登山道を約100m入ったところで、野鳥調査用のかすみ網にオスとメスの2頭がかかったということであった。

ウサギ目 LAGOMORPHA

ウサギ科 LEPORIDAE

ノウサギ *Lepus brachyurus*

10月5日の昼過ぎ、弓折牧場周辺の山中で比較的新しいウサギの食痕（ヤツデの葉）が見つかった。また、その付近でウサギの糞を発見した。（写真2・3）

糞は直径10mm～15mmでやや偏平な丸い形をしており、1塊り1個～8個、全部で16個の糞が落ちていた。

ノウサギの糞はひとかたまり数十個というのが普通で、それに比べるとかなり量が少ないように思われた。

ウサギの仲間は自分の盲腸から排泄される栄養のある軟らかい糞を食べる習性があるが、筆者はアマミノクロウサギで軟らかい糞を食べるほかに、普通の硬い糞まで食べるのを観察したことがある。ノウサギにもその習性があり、食草の少ない場では自分の硬い糞まで食べているのではないかと思われる。

今回の調査でノウサギの糞を確認したが、ほぼ1日中さがしてやっと1ヵ所で食痕と糞を見つげられたほどなので、生息数はかなり少ないと思われる。

げっ歯目 RODENTIA

ネズミ科 MURIDAE

アカネズミ *Apodemus speciosus*

ヒメネズミ *Apodemus argenteus*

足跡図鑑（子安和弘）によると下甑島にはアカネズミ、ヒメネズミが生息していることになっている。

林道でイタチの糞の近くに赤褐色をした毛のかたまりが落ちていた。毛質や毛色等からアカネズミかヒメネズミの背面の毛ではないかと思われた。

食肉目 CARNIVORA

イヌ科 CANIDAE

ノイヌ *Canis familiaris*

ノイヌとは山野でノウサギやネズミなどを食べながら自活している真に野生化したイヌのことであり、人家の周辺を徘徊する野良犬とは区別されている。もともと人に飼われていたイヌであるが甑島の自然とけ込みその生態系に大きく影響している動物と思われるのでここでは取り上げた。

甑島には昔からノイヌが多く生息しているということを聞いていたので、期待していたが残念ながら姿を見ることはできなかった。

しかし、ノイヌのものとは断定できないが、林道でイヌの糞と足跡が見られた。

その糞を持ち帰って調べたところ、ほとんどネズミの毛の塊であった。

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

1978年、鹿児島県が行った第2回自然環境保全基礎調査でタヌキの生息が確認されている。今回は姿を見なかったが聞き取り調査によりタヌキは生息していると思われる。

イタチ科 MUSTELIDAE

ホンドイタチ *Mustela sibirica itatsi*

今回の調査で一番多く見られた種で、昼間から人家近くの側溝を走っているのが見かけられた。10月4日調査開始早々に2頭を見たほか、5日は夜間の林道沿いで4頭を確認した。また、5日の夕方ネズミ捕り用のかごワナで1頭を捕獲した。(写真4) 林道沿いにはイタチの糞が多数見られたほか、人家近くの田畑には多数の足跡が見られた。イタチの生息密度はかなり高いと思われた。

なお、食性を調べるため林道で採取した糞を分析した結果、コガネムシなど甲虫や、バッタ科、キリギリス科などの昆虫類、甲殻類(サワガニ)などを食べていることが分かった。

ニホンカワウソ *Lutra lutra whiteleyi*

橋口義達氏の話によるとカワウソは昭和10年ごろは手打湾付近にもいたという。

また、地元の人が5~6年前に佐ノ浦湾でカワウソを見たという情報を得たので、念のため佐ノ浦湾一帯でカワウソの糞や足跡などを探したが手掛かりになるようなものは見つからなかった。(写真5)

ニホンアナグマ *Meles meles anakuma*

昭和49年、迫静男氏は下甑村瀬々野浦小学校所蔵の剥製標本でニホンアナグマを確認している。

しかし、今回の調査では現在生息しているという確証は得られなかった。

その他の動物

ニホンシカ (*Cervus nippon*) とニホンイノシシ (*Sus scrofa*)

下甑村手打の弥生末期から古墳時代の大原・宮藪遺跡からシカやイノシシの骨が多数出土していることから古代には生息していたことがうかがえる。

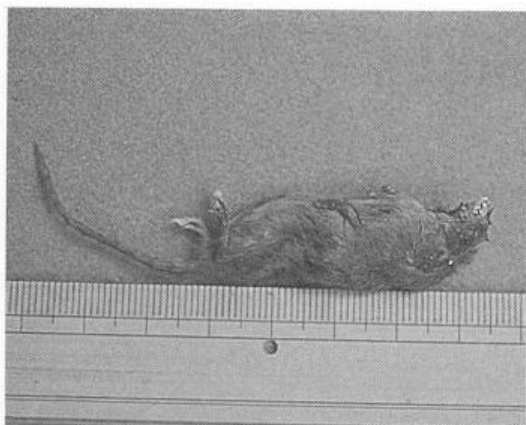
現在は両種とも絶滅して下甑島には生息していないとされている。

(5) さいごに

今回の調査では何かと便宜を図っていただき3日間とも自家用車を提供して下さった下甑村教育委員会の田中智治先生をはじめ、煩わしい聞き取り調査にご協力を頂きますとともに貴重な標本を送って下さった橋口義達氏、キクガシラコウモリの写真や情報をいただいた田尻小教諭の溝口文男先生に心から感謝いたします。

参考文献

- 1) 今泉吉典 1960: 原色日本哺乳類図鑑 保育社
- 2) 大塚閏一 1974: 鹿児島県薩摩郡下甑村手打 大原・宮藪遺跡 下甑村教育委員会
- 3) 子安和弘 1994: フィールドガイド 足跡図鑑, 日経サイエンス社
- 4) 迫 静男 1974: 甑島自然公園候補地学術調査報告書(動物) 財団法人国立公園協会
- 5) 橋口義民 1986: 文化誌日本 鹿児島県 講談社
- 6) 増井光子 1976: 日本の動物 小学館
- 7) 安間繁樹 1985: アニマル・ウォッチング 日本の野生動物 晶文社



ジネズミ 1994.10.14
橋口義達氏採集(手打)



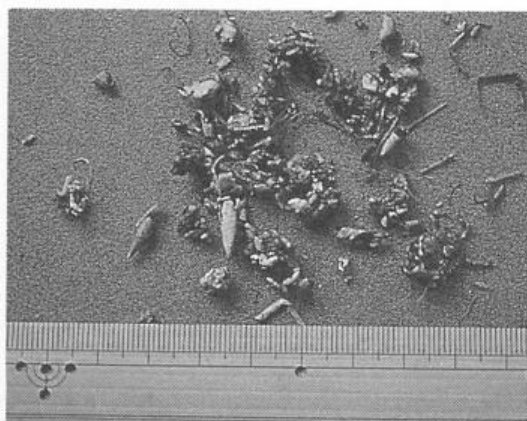
ノウサギの食痕 1994.10.5
ヤツデの葉柄だけ食べられていた。(林道)



ノウサギの糞 1994.10.5
まばらで数が大変少ない。(林道)



イタチ 1994.10.5
かごワナにかかった個体,翌朝放す。



イタチの糞の内容物 1994.10.5



佐ノ浦湾 1994.10.5
ここでカワウソを探索したが,手掛りはなかった。

(執筆者 酒匂 猛)

9 北薩地区の哺乳類相

(1) はじめに

北薩地区のうち、大口市の国見山地、薩摩町の永野金山及び株の谷、横川町の国見岳周辺、栗野町天神川流域及び栗野岳周辺、出水市定ノ段などで調査を行ったのでその概要を報告する。

(2) 調査期間

1994年12月～1995年1月

(3) 調査方法

実際に山野を歩いて動物の足跡や糞などフィールドサインを探す踏査法や地元の人に聞く聞き取り法、ネズミ類をトラップで捕まえる捕獲法を主に夜間は車で林道を走りながら動物を観察するロードセンサス法などを行った。

(4) 調査結果

食虫目 INSECTIVORA

モグラ科 TALPIDAE

モグラ *Mogera wogura*

モグラの生息範囲は広く、今回調査したほとんどの地区の人家周辺や田畑、牧草地山中等いたる所でモグラ塚やトンネルが見られた。

特に多かったのは栗野岳にある牧場の草地で、土を耕したように無数のモグラ塚が見られた。このモグラ塚は直径25cm～30cmのものが多かったが直径45cm以上という大きいものも多く見られた。この地域はアズマモグラが生息しているとされている（今泉吉晴他）がコウベモグラが生息しているという（子安他）文献もあり多少混乱していると思われるので、今後確認のため捕獲して調べる必要がある。

ヒミズ *Urotrichus talpoides*

ヒミズもモグラと同じようにトンネルを掘って暮らしている。直径3cm以下と言われるヒミズの坑道は大口市布計や久七峠などの国見山地や栗野岳、国見岳周辺など山地に多く見られた。

翼手目 CHIROPTERA

キクガシラコウモリ科 RHINOLOPHIDAE

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*

栗野町の天神川左岸でシラス崖に掘られた、広さ4m²、高さ1.7mの洞（がま）にただ1頭だけで冬眠しているオスを捕獲した。（1月13日）

冬眠中のコウモリは仮死状態で素手でも容易に捕まえることができ、およそ30分ぐらいは眠りから覚めなかった。頭胴長53mm、耳長22mm、尾長40mm。（写真1）

霊長目 PRIMATES

オナガザル科 CERCOPITHECIDAE

ニホンザル *Macaca fuscata fuscata*

横川町農林商工課の話によると横川町、薩摩町、大口市の周辺にはおよそ130頭のニホンザルが生息しているらしい。彼らは3群に分かれているが3群とも国見岳の周辺を遊動していると見られている。

現在、農作物を荒らすので有害獣として捕獲されている。(写真2)

国見岳周辺の白仁田、高木、若宮、金山などの集落で地元の人に聞いたところ、1グループ約20~30頭の群が周期的に現れ、畑の大根やサツマイモなど農作物を食べて行くという。

大口市の布計や笹野など国見山地や栗野岳などではサルの子の情報は得られなかった。(ただし、ヒトリザルは布計、笹野でもときどき見られるという。)

ウサギ目 LAGOMORPHA

ウサギ科 LEPORIDAE

キュウシュウノウサギ *Lepus brachyurus brachyurus*

栗野町天神川右岸、栗野岳、国見岳、鶴田ダム湖左岸(薩摩町株の谷)などで多数の糞を観察したほか、熊本県との境に近い布計の県道15号線(人吉・水俣線)で雪の上に残されたノウサギの足跡を観察した。(写真3)

げっ歯目 RODENTIA

ネズミ科 MURIDAE

ネズミ類は足跡や巣穴、通路など多くのフィールドサインが見られたが、これらによる種の判定は避け、今回スナップ式トラップで捕獲したものの2種について述べる。

スミスネズミ *Eothenomys smithi*

日 時：1995年1月22日 午後8時ごろ

場 所：国道267号線、元古屋・笹野間の道路沿い

性 別：オス

計 測：頭胴長 90mm, 尾長40mm, 耳長9mm, 耳巾4mm, 後足長17mm。

アカネズミ *Apodemus speciosus* (写真4)

日 時：1995年1月22日 午後8時ごろ

場 所：国道267号線、元古屋・笹野間の道路沿い

性 別：オス

計 測：頭胴長 90mm, 尾長 77mm, 耳長 15mm, 耳巾 7mm, 後足長 23mm。

食肉目 CARNIVORA

イヌ科 CANIDAE

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

大口市布計の山中でタヌキのため糞や足跡を確認した。また、1994年12月28日午前0時38分、ロードセンサス中、祁答院町大村麓で道路を横断しているタヌキに出会った。聞き取り調査で、タヌキは最近かなり増えているというところが多かった。

キツネ *Vulpes vulpes*

1995年1月14日、大口市布計の県道15号線（人吉・水俣線）で雪の中にイタチなどの足跡とともにキツネの足跡も見られた。（写真5）

また、1991年12月13日に、若い雄キツネが薩摩町求名の農家のニワトリ小屋に入って捕らえられたことがある。（この個体は現在、平川動物公園で保護されている。）

聞き取りによるキツネの情報は非常に乏しく、その生息はきびしい状況にあると思われる。栗の原牧場の薬師寺忠澄氏によれば、昔は栗野岳周辺で見かけたが最近は見ないという。

イタチ科 MUSTELIDAE

ホンドイタチ *Mustela sibirica itatsi*

1995年1月14日、大口市布計の県道15号線（人吉・水俣線）で雪の中に足跡が見られたほか、栗野町天神川、栗野岳周辺などいたるところで糞や足跡が見られた。

テン *Martes melampus*

1995年1月14日、大口市布計の県道15号線（人吉・水俣線）で雪の中にテンのものと思われる足跡が見られた。地元猟師の話によると、テンはときどき見かけるということであった。

ニホンアナグマ *Meles meles anakuma*

1995年1月6日、栗野町天神川右岸の田圃で足跡を確認した。

偶蹄目 ARTIODACTYLA

イノシシ科 SUIDAE

ニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax*

大口市布計の鉾山跡、栗野岳、国見岳、薩摩町株の谷などの山中や山野や笹野の田圃等にイノシシの土耕跡（採食のため土を掘り起こしたあと）や足跡が見られた。

広く分布しているが狩猟圧のため最近は数が少なくなっているといわれている。

シカ科 CERVIDAE

キュウシュウジカ *Cervus nippon nippon*

1月13日、栗野岳周辺にシカの糞や足跡が多数見られた。栗の原牧場の薬師寺氏によると5～6年前から姿を現すようになり、最近は数も相当に増え牧草を食べに来るので被害が大きいという。栗野岳のシカは、隣接の宮崎県えびの高原に現れる群と同じものと思われる。

1月7日、国道328号線沿いの出水市定ノ段の山中でシカの母子づれ3頭を確認した。この山中にはシカの糞や足跡が無数にあり、かなりの数が生息しているものと思われた。また、1月30日、県道鶴田ダム曾木滝線の株谷橋（薩摩町）から約50m山に入ったところで新旧多数のシカの糞や足跡が見られた。

(5) まとめ

今回の調査で食虫目1科2種、翼手目1科1種、霊長目1科1種、ウサギ目1科1種、げっ歯目1科2種、食肉目2科4種、偶蹄目2科2種、合計7目13種の哺乳類が判明した。



参考文献

- 1) 今泉吉典 1960: 原色日本哺乳類図鑑 保育社
- 2) 今泉吉晴 1985: モグラ, 地下の宇宙ステーション 平凡社
- 3) 子安和弘 1994: フィールドガイド 足跡図鑑 日経サイエンス社
- 4) 増井光子 1976: 日本の動物 小学館
- 5) 安間繁樹 1985: アニマル・ウォッチング 日本の野生動物 品文社



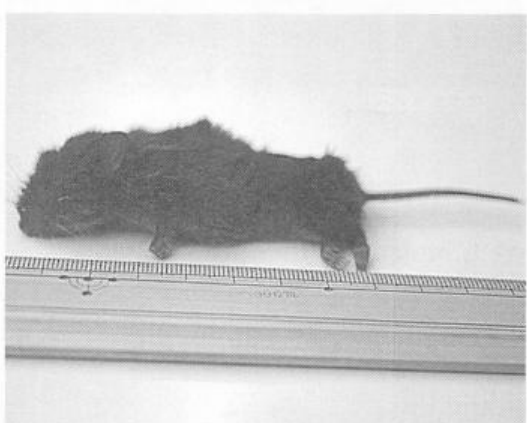
キクガシラコウモリ 1995. 1. 13
栗野町天神河左岸



横川町で捕まったニホンザル 1995. 1. 30
横川町上ノ



ノウサギの足跡 1995. 1. 14
大口市布計



スミスネズミ 1995. 1. 22
大口市元古屋



雪の上の足跡 1995. 1. 14
大口市布計 (県道15号線)

4種類の動物が通った足跡が残っていた。
キツネ (右端), イタチ (右端2番目)
テン? (中央), タヌキ (左端)
ここではネズミ類の足跡も無数に見られた。



シカの糞 1995. 1. 6
栗野岳

(執筆者 酒匂 猛)

10 下甌島の留鳥

甌島は薩摩半島の西方約20kmの海上にあり、上甌島、平島、下甌島と北東から南西に長く連なり、延長38km、面積は105km²に達する。島の地形の概要は、平地はほとんどなく海岸線の大部分は断崖で、特に北西部の海岸は急な断崖で海に接している。下甌島は3島の中で最も大きく地形も複雑であり、島の背骨ともなる山岳は尾岳(604m)を最高に青潮岳(510m)、小田山、瀬尾山などがある。西海岸は殆ど断崖であるが、東岸は長浜、青瀬、手打には砂浜が発達している。気候は暖流の影響で暖かく、佐多岬、屋久島の一湊と同じで霜を見ることはないといわれている。

甌島の鳥類相は他の鹿児島県沿岸に存在する島嶼の鳥類相に類似する。又、甌島は宇治群島や草垣諸島とならび渡り鳥の中継地点として重要な島でもある。

甌島の鳥類についての詳細な調査は少ない。今回、1994年10月30日から11月1日までの3日間にわたり鳥類観察の機会を得た。短期間で一人の記録であり、出現種の数に限界があったが、ここでは期間中、島内を車の移動による観察記録と調査地点を設定したラインセンサス法による調査を手打佐之浦林道(10月31日7:00~8:00)と手打集落耕作地(11月1日7:00~8:00)で実施したので、その結果を合わせて報告する。

(1) 調査結果と考察

調査期間中確認した鳥類(留鳥・渡り鳥・漂鳥など含む)はカツオドリ、アマサギ、コサギ、クロサギ、マガモ、トビ、キジ、タゲリ、イソシギ、カラスバト、キジバト、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ノビタキ、イソヒヨドリ、シロハラ、ウグイス、セッカ、ヤマガラ、メジロ、ホオジロ、ホオアカ、ミヤマホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ホシムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの32種であった。この中に甌島の鳥とも言える留鳥と漂鳥(狭い範囲・島内)と思われる種は下記の6目16科21種であった。

調査時に出現した留鳥(漂鳥も含む)の鳥類目録

コウノトリ目 CICONIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

コサギ *Egretta garzetta garzetta* (Linnaeus)

クロサギ *Egretta sacra sacra* (Gmelin)

ワシタカ目 FALCONIFORMES

ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

トビ *Milvus migrans lineatus* (J. E. Gray)

キジ目 GALLIFORMES

キジ科 PHASIANIDAE

キュウシュウキジ *Phasianus colchicus varicolor* Vieillot

チドリ目 CHARADRIIFORMES

シギ科 SCOLOPACIDAE

イソシギ *Tringa hypoleucos* Linnaeus

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

カラスバト *Columba janthina janthina* (Temminck)

キジバト *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham)

スズメ目 PASSERIFORMES

セキレイ科 MOTACILLIDAE

キセキレイ *Motacila cinerea robusta* (Brehm)

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis* (Temminck)

モズ科 LANIIDAE

モズ *Lanius bucephalus bucephalus* (Temminck & Schlegel)

ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

イソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis* (Müller)

ウグイス *Cettia diphone cantans* (Temminck & Schlegel)

セッカ *Cisticola juncidis brunniceps* (Temminck & Schlegel)

シジュウカラ科 PARIDAE

ヤマガラ *Parus varius varius* (Temminck & Schlegel)

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

メジロ *Zosterops japonica japonica* (Temminck & Schlegel)

ホオジロ科 EMBERIZIDAE

ホオジロ *Emberiza cioides ciopsis* Bonaparte

アトリ科 FRINGILLIDAE

カワラヒワ *Carduelis sinica minor* (Temminck & Schlegel)

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

スズメ *Passer montanus saturatus* Stejeger

ムクドリ科 STURNIDAE

ムクドリ *Sturnus cineraceus* (Temminck)

カラス科 CORVIDAE

ハシボソガラス *Corvus corone orientalis* Eversmann

ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos japonensis* Bonaparte

1994年の10月30日から11月1日時点では渡り鳥(冬鳥)の姿も多くみられ、特に低地ではジョウビタキの密度が高いように思えた。

今回の下甌島の調査時期の鳥相は、

① 生物(鳥類)季節 phenology (その地方にすみ、あるいは出現する鳥類の移動や繁殖の季節的な研究)の観点からみると、21種が留鳥もしくは漂鳥、8種が冬鳥、夏鳥でありながら越冬している鳥(アマサギ)、迷鳥(ホシムクドリ)、繁殖地は近隣の島嶼でありながら甌島に飛来する鳥(カツオドリ)であった。

② 鳥類個体群 avian population (その地方の鳥類の数量的および生産的な研究)の観点からみると、手打佐之浦林道で平均優占度は、メジロ34%で最も多く、次いでヒヨドリ17%、キジバ

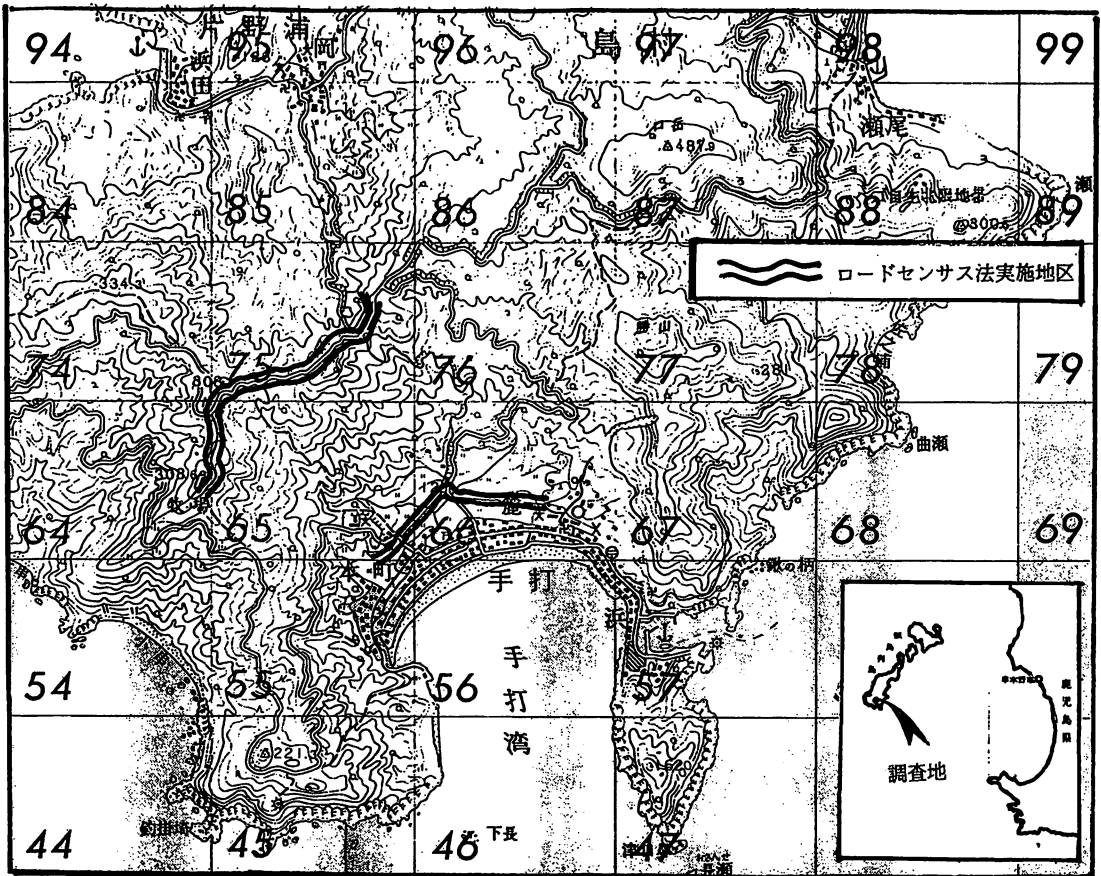
ト15%であり、これらの種ですでに66%を占めている。手打集落耕作地で平均優占度は、カワラヒワ46%で最も多く、次いでスズメ31%、ハシブトガラス9%であり、これらの種ですでに86%を占めている。このように2～3種の鳥が優占種となるのは、とくに各地の島嶼の鳥相に共通な現象であるとされている。

③ 鳥類群集 bird communit (その地方の鳥類の環境や相互関係) について述べると、手打佐之浦林道の鳥相は森林鳥類群集と草原鳥類群集が混在し、手打集落耕作地の鳥相は草原鳥類群集が主になっていた。

今回の観察された鳥類の中には天然記念物に指定され、そして特殊鳥類として「レッドデータブック」(日本の絶滅のおそれのある野生生物)の掲載種の危急種に区分されたカラスバトを手打集落周辺の林で確認した。

九州本土では最も一般的な留鳥であり、森林鳥類群集の主役とも言えるシジュウカラ、コゲラについて、注意深い確認調査を実施したが、下飯島では確認出来なかった。はたしてこれらの種がマイナス分布であるのか否か、今後の詳細な調査を待たなければ結論は出せない。

飯島は草垣諸島や宇治群島と並び、渡り鳥の中継点にもなっており、重要な地点である。今後とも、時期を変えた詳細な調査が必要と思える。



下飯島における鳥類調査のロードセンサス法実施地区

手打佐之浦林道におけるロードセンサス法により確認された鳥類

種	名	観察時期 ('94, 10/31)		備 考
		7:00~8:00		
		総 個 体 数	平均優占度	
1	メジロ	38	34	留鳥 (漂鳥)
2	ヒヨドリ	19	17	留鳥
3	キジバト	17	15	留鳥
4	ホオジロ	10	9	留鳥 (漂鳥)
5	ウグイス	10	9	留鳥 (漂鳥)
6	ヤマガラ	3	3	留鳥
7	カワラヒワ	3	3	留鳥 (漂鳥)
8	ハシブトガラス	2	2	留鳥
9	シロハラ	2	2	冬鳥
10	キセキレイ	2	2	留鳥 (漂鳥)
11	キジ	1	1	留鳥
12	ジョウビタキ	1	1	冬鳥
13	トビ	1	1	留鳥
14	モズ	1	1	留鳥 (漂鳥)
14種		110 個体		

手打集落耕作地におけるロードセンサス法により確認された鳥類

種	名	観察時期 ('94, 10/31)		備 考
		7:00~8:00		
		総 個 体 数	平均優占度	
1	カワラヒワ	173	46.13	留鳥 (漂鳥)
2	スズメ	119	31.73	留鳥
3	ハシブトガラス	35	9.33	留鳥
4	ノビタキ	11	2.93	冬鳥
5	ジョウビタキ	8	2.13	冬鳥
6	ホオジロ	8	2.13	留鳥 (漂鳥)
7	ムクドリ	7	1.86	留鳥
8	ハクセキレイ	3	0.80	冬鳥
9	ヒバリ	3	0.80	留鳥
10	コサギ	2	0.53	留鳥
11	トビ	2	0.53	留鳥
12	モズ	2	0.53	留鳥 (漂鳥)
13	ホシムクドリ	1	0.26	迷鳥
14	タゲリ	1	0.26	冬鳥
14種		375 個体		

(執筆者 鮫島正道)

11 下甌島の鳥類相について

(1) はじめに

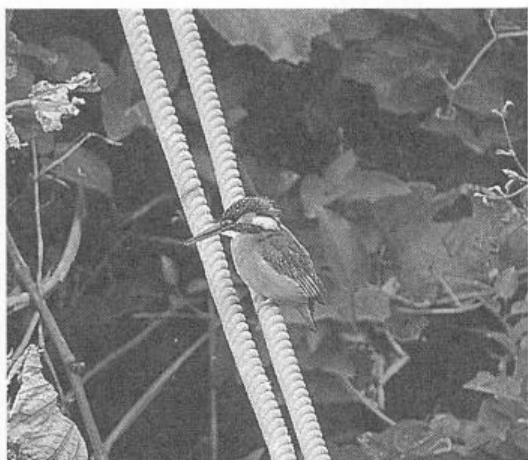
今回の調査では、季節ごとの調査をすることができなかった。亜種名については、観察で識別できるものだけ付記することにした。(小文字は亜種名)

(2) 概要

周年の調査資料はない。文献と観察記録から作成した甌島の目録に今回観察された種に○をした。

アビ目		オオヨシガモ	
アビ科		チドリ目	
シロエリオオハム		ヒドリガモ	○
カイツブリ目		オナガガモ	
カイツブリ科		シマアジ	
カイツブリ		ハシビロガモ	
ハジロカイツブリ		ホシハジロ	
ミミカイツブリ		キンクロハジロ	
カンムリカイツブリ		スズガモ	
ミズナギドリ目		ホオジロガモ	
ミズナギドリ科		シコアイサ	
オオミズナギドリ		ワシタカ目	
ペリカン目		ワシタカ科	
カツオドリ科		ミサゴ	○
カツオドリ	○	トビ	○
ウ科		アカハラダカ	○
ウミウ		ツミ	
コウノトリ科		ノスリ	
サギ科		サシバ	○
ゴイサギ	○	ハヤブサ	○
ササゴイ	○	チゴハヤブサ	
アカガシラサギ		チョウゲンボウ	
アマサギ		キジ目	
ダイサギ		キジ科	
チュウサギ		キジ	○
コサギ		ツル目	
クロサギ	○	ツル科	
アオサギ		ナベツル	
ガンカモ目		クイナ科	
ガンカモ科		ヒクイナ	
オシドリ		オオバン	
マガモ		チドリ目	
カルガモ	○	チドリ科	
コガモ	○	シロチドリ	
ヨシガモ		メダイチドリ	

ムナグロ		ヤマショウビン	
シギ科		カワセミ	
キョウジョシギ		ブッポウソウ科	
トウネン		ブッポウソウ	
ハマシギ		キツツキ目	
アオアシシギ		キツツキ科	
クサシギ		アリスイ	
タカブシギ		スズメ目	
キアシシギ	○	ヒバリ科	
イソシギ	○	ヒバリ	
ソリハシシギ		ツバメ科	
オグロシギ		ショウドウツバメ	
ダイシャクサギ		ツバメ	○
タシギ		コシアカツバメ	
オオジシギ		イワツバメ	○
アオシギ		セキレイ科	
ヒレアシシギ科		イワミセキレイ	○
アカエリヒレアシシギ		ツメナガセキレイ	
ツバメチドリ科		マミジロツメナガセキレイ	
ツバメチドリ		キタツメナガセキレイ	
カモメ科		キマユツメナガセキレイ	
セグロカモメ		シベリアツメナガセキレイ	
ウミネコ	○	キセキレイ	○
アジサシ		ハクセキレイ	
コアジサシ		ハクセキレイ	
ウミスズメ科		タイワンハクセキレイ	
カンムリウミスズメ		アマミジロタヒバリ	
ハト目		ピンズイ	
ハト科		ムネアカタヒバリ	
カラスバト	○	タヒバリ	
キジバト	○	サンショウクイ科	
アオバト		サンショウクイ	○
ホトトギス目		ヒヨドリ科	
ホトトギス科		ヒヨドリ	○
ツツドリ		モズ科	
ホトトギス		モズ	○
フクロウ目		アカモズ	
フクロウ科		シマアカモズ	
アオバズク	○	アカモズ	
アマツバメ目		レンジャク科	
アマツバメ科		キレンジャク	
ヒメアマツバメ	○	ヒタキ科	
アマツバメ		コルリ	
ブッポウソウ目		ジョウビタキ	
カワセミ科		イソヒヨドリ	○



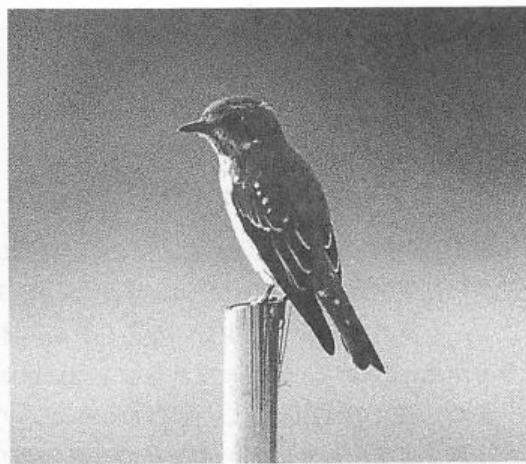
カワセミ (甌島)



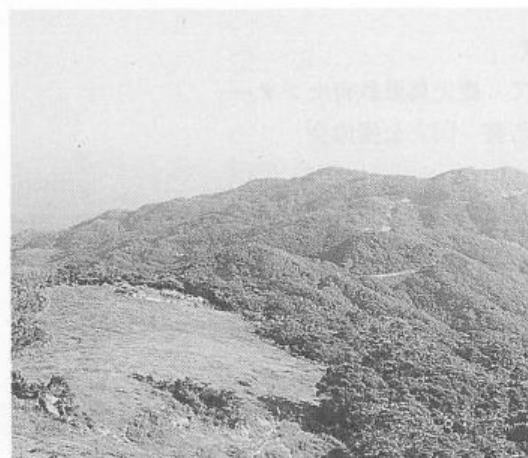
ハシボソガラス (甌島)



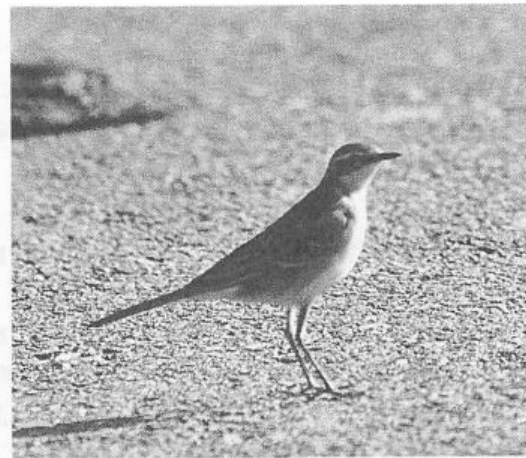
ホオジロ (甌島)



エゾヒタキ (甌島)



ロードセンサス調査地 (甌島)
釣掛崎～牧場



ツメナガセキレイ (甌島)

アカハラ		ホオアカ	
シロハラ	○	コホオアカ	
ツグミ		カシラダカ	
ヤブサメ	○	ミヤマホオジロ	
ウグイス	○	シマアオジ	
オオヨシキリ		シマノジロ	
メボソムクシイ	○	アオジ	
センダイムシクイ		アトリ科	
セッカ	○	カワラヒワ	○
キビタキ		イカル	
オオルリ	○	シメ	
サメビタキ	○	ハタオリドリ科	
エゾビタキ	○	スズメ	○
コサメビタキ		ムクドリ科	
サンコウチョウ		コムクドリ	○
シジュウカラ科		ムクドリ	○
ヤマガラ	○	カラス科	
メジロ科		コクマルガラス	
メジロ	○	ハシボソガラス	○
ホオジロ科		ハシブトガラス	○
ホオジロ	○		

以上137種の記録をまとめた。また、今回は、47種の鳥を観察することができた。ロードセンサスの結果常緑広葉樹の林では、メジロ、ヒヨドリ、ウグイスなどが優占している。また、ヤマガラ、カラスバトなども少ないがみられる。本土の林で出現する、シジュウカラ、エナガ、コゲラ等が見られない。シジュウカラは1回記録があるが疑問種として除いた。

また、渡りの時期なので、数は少ないが、アカハラダカやサシバなどのタカ類の渡りやオオルリ、エゾビタキ、サメビタキなどの小鳥の渡りも見ることができ通過地点になっているようだ。(調査表-2)

参考文献

- 1) 桑原一広 1970: 甌島におけるウミネコについて 鹿児島県教育センター
- 2) 迫静夫 1975: 甌島自然公園候補地学術調査報告書 国立公園協会
- 3) 日本野鳥の会 1978: 鳥類繁殖地図調査
- 4) 高良武信, 沼秀昭, 溝口文雄 1981.5.2-5: 甌島鳥類調査報告 (ガリ刷り)
- 5) 沼秀昭 6名 1983.5.1-3: 甌島探鳥記 鹿児島の野鳥 No.14
- 6) 溝口文男 1987.9.13-14: 甌島標識記録
- 7) 田悟敏弘 1987.5.4-5: 甌島探鳥記録 鹿児島の野鳥 No.32
- 8) 日本野鳥の会 1988: 動物分布調査報告書(鳥類9)
- 9) 溝口文男 1994.2.26-27: 甌島里村探鳥記録

鳥類調査票例

鳥 類 調 査 票

平成6年9月23日 調査者(溝口文男)

調査地				下飯村 市町 手打牧場から釣掛崎燈台		地図番号		1/2,500 手打	
調査方法				ロードセンサス 50m×2km 60分		天候		晴れ	
種	名	羽数	計	種	名	羽数	計		
アカハラ	ダカ	23, 24, 6, 51	104						
メ	ジロ	1, 5, 5, 3	14						
ツ	バメ	1, 9, 3	13						
ヒ	ヨドリ	2, 1, 1, 3, 5	12						
ウ	グイス	1, 1, 1, 1, 1, 1	6						
ホ	オシロ	3	3						
ト	ビ	3	3						
エ	ゾビタキ	1, 1	2						
カ	ラスバト	1, 1	2						
ハ	ヤブサ	2	2						
イ	ソヒヨドリ	1	1						
イ	ワミセキレイ	1	1						
ハ	シボソガラス	1	1						
合	計	羽数	164	種	13				
摘 要 牧場から林道を釣掛崎まで歩いた。ウグイスの地鳴きやメジロがムクゲの花に集まっているのが目についた。 アカハラダカは、今回初めて群れで観察されたのでワシタカ類の渡りのポイントになる地点ではなかろうか。									

鳥 類 調 査 票

平成6年9月22日 調査者(溝口文男)

調査地				下飯村 市町 手打		地図番号		1/25,000 手打	
調査方法				定点観察法 17:00~17:30		天候		晴れ	
種	名	羽数	計	種	名	羽数	計		
ツ	バメ	214	214						
ハ	シボソガラス	2, 20, 20, 30	72						
ス	ズメ	30	30						
カ	ワラヒワ	3	3						
キ	セキレイ	3	3						
ハ	シブトガラス	3	3						
ヒ	ヨドリ	2	2						
ア	カモズ(シマアカモズ)	1	1						
サ	サゴイ	1	1						
セ	ツカ	1	1						
モ	ズ	1	1						
ヤ	マガラ	1	1						
合	計	羽数	332	種	12				
摘 要 手打の集落が見渡せる場所で観察した。ズメやツバメ、カラスの集団のねぐら入りの前の集団が見られた。ツバメは、渡りの群れがどこかで休むと思われたが見失った。他のツバメも普通は、まじるのだがツバメだけの群れであった。カラスは、ハシボソガラスが多く、ハシブトガラスは、少なかった。									

(執筆者 溝口文男)

12 出水平野の鳥類相について

(1) はじめに

5月から12月までの年間を通した観察記録(調査表)と文献から目録を作成した。今年度観察された種には○をした。

(2) 概要

出水平野は、冬季にツルをはじめとして冬鳥がたくさんやってくる。年間を通じて記録された種が多く、大型の水鳥やワシタカ類もよく見ることができる。

アビ目		クロサギ	○
アビ科		アオサギ	○
アビ		ムラサキサギ	
シロエリオオハム		コウノトリ科	
カイツブリ目		コウノトリ	
カイツブリ科		ナベコウ	
カイツブリ	○	トキ科	
ハジロカイツブリ		へらサギ	
ミミカイツブリ		クロツラへらサギ	
アカエリカイツブリ		クロトキ	
カンムリカイツブリ	○	ガンカモ目	
ミズナギドリ目		ガンカモ科	
ミズナギドリ科		コクガン	
オオミズナギドリ	○	ハイイロガン	
ペリカン目		マガン	
カツオドリ科		ヒシクイ	
カツオドリ	○	サカツラガン	
ウ科		オオハクチョウ	
カワウ		コハクチョウ	○
ウミウ		アカツクシガモ	
ヒメウ		ツクシガモ	○
コウノトリ目		オシドリ	○
サギ科		オシドリ	○
サンカノゴイ		マガモ	○
ヨシゴイ	○	カルガモ	○
ミゾゴイ		コガモ	○
ゴイサギ	○	トモエガモ	○
ササゴイ	○	ヨシガモ	○
アカガシラサギ	○	オカヨシガモ	○
アマサギ	○	ヒドリガモ	○
ダイサギ	○	アメリカヒドリ	○
チュウサギ	○	オナガガモ	○
コサギ	○	シマアジ	○
カラシラサギ		ハシビロガモ	○

ホシハジロ ○
 キンクロハジロ ○
 スズガモ ○
 ビロードキンクロ
 ホオジロガモ
 ミコアイサ
 ウミアイサ
 カワアイサ
 ワシタカ目
 ワシタカ科
 ミサゴ ○
 トビ ○
 オジロワシ
 オオタカ
 ツミ ○
 ハイタカ ○
 ケアシノスリ
 オオノスリ
 ノスリ ○
 サシバ
 カタシロワシ
 クロハゲワシ
 ハイイロチュウヒ
 マダラチュウヒ
 チュウヒ ○
 ハヤブサ科
 ハヤブサ ○
 チゴハヤブサ
 コチョウゲンボウ ○
 チョウゲンボウ ○
 キジ目
 キジ科
 ウズラ
 コジュケイ ○
 ヤマドリ
 キジ ○
 ツル目
 ツル科
 クロヅル ○
 タンチョウ
 ナベヅル ○
 カナダヅル ○

マナヅル ○
 ソデグロヅル ○
 アネハヅル
 クイナ科
 クイナ ○
 ヒメクイナ
 ヒクイナ ○
 シマクイナ
 シロハラクイナ
 バン ○
 ツルクイナ
 オオバン ○
 チドリ目
 タマシギ科
 タマシギ ○
 チドリ科
 ハジロコチドリ
 コチドリ ○
 イカルチドリ ○
 シロチドリ ○
 メダイチドリ ○
 オオメダイチドリ
 オオチドリ
 ムナグロ ○
 ダイゼン ○
 ケリ ○
 タゲリ ○
 シギ科
 キョウジョシギ ○
 ヨウロップトウネン
 トウネン ○
 ヒバリシギ ○
 オジロトウネン ○
 アメリカウズラシギ
 ウズラシギ ○
 ハマシギ ○
 サルハマシギ
 コオバシギ
 オバシギ ○
 ミユビシギ
 ヘラシギ
 エリマキシギ

キリアイ		コアシサシ	○
オオハシシギ		ハ ト 目	
シベリアオオハシシギ		ハト科	
ツルシギ		ベニバト	
アカアシシギ	○	キジバト	○
コアオアシシギ		アオバト	○
アオアシシギ	○	ホトトギス目	
クサシギ	○	ホトトギス科	
タカブシギ	○	ジュウイチ	○
キアシシギ	○	カッコウ	
イソシギ	○	ツツドリ	
ソリハシシギ	○	ホトトギス	○
オグロシギ		フクロウ目	
オオソリハシシギ		フクロウ科	
ダイシャクシギ	○	トラフズク	
ハウロクシギ		コミミズク	○
チュウシャクシギ	○	オオコノハズク	
コシャクシギ		アオバズク	○
ヤマシギ	○	フクロウ	
タシギ	○	アマツバメ目	
ハリオシギ		アマツバメ科	
チュウジシギ		ヒメアマツバメ	○
オオジシギ		アマツバメ	○
セイタカシギ科		ブッポウソウ目	
セイタカシギ		カワセミ科	
ヒレアシシギ科		ヤマセミ	○
アカエリヒレアシシギ	○	アカショウビン	○
ツバメチドリ科		カワセミ	○
ツバメチドリ		ブッポウソウ科	
カモメ科		ブッポウソウ	
ユリカモメ	○	ヤツガシラ科	
セグロカモメ	○	ヤツガシラ	
オオセグロカモメ	○	キツツキ目	
カモメ		キツツキ科	
ウミネコ	○	アリスイ	
ズグロカモメ		アオゲラ	
ミツユビカモメ		オオアカゲラ	
ハジロクロハラアジサシ		コゲラ	○
クロハラアジサシ		スズメ目	
ハシブトアジサシ		ヒバリ科	
アジサシ		ヒメコウテンシ	
セグロアジサシ		コヒバリ	

ヒバリ	○	ノビタキ	○
ツバメ科		サバクヒタキ	
ショウドウツバメ	○	イソヒヨドリ	○
ツバメ	○	トラツグミ	
コシアカツバメ	○	アカハラ	
イワツバメ	○	シロハラ	○
セキレイ科		マミチャジナイ	
ツメナガセキレイ	○	ツグミ	○
キマユツメナガセキレイ		ヤブサメ	
マミジロツメナガセキレイ		ウグイス	○
キガシラセキレイ		シマセンニュウ	
キセキレイ	○	コヨシキリ	○
ハクセキレイ		オオヨシキリ	○
ハクセキレイ	○	メボソムシクイ	
タイワンハクセキレイ		センダイムシクイ	
セグロセキレイ	○	クイタダキ	
マミジロタヒバリ		セッカ	○
ビンズイ	○	キビタキ	
セジロタヒバリ		セッカ	○
ムネアカタヒバリ		キビタキ	
タヒバリ	○	ムギマキ	
サンショウクイ科		オオルリ	
サンショウクイ	○	サメビタキ	
ヒヨドリ科		エゾビタキ	○
ヒヨドリ	○	コサメビタキ	
モズ科		サンコウチョウ	
モズ	○	エナガ科	
アカモズ		エナガ	○
レンジャク科		ツリスガラ科	
キレンジャク		ツリスガラ	○
ヒレンジャク		ジジュウカラ科	
カワガラス科		ヒガラ	
カワガラス	○	ヤマガラ	○
ミソサザイ科		シジュウカラ	○
ミソサザイ		ゴジュウカラ科	
イワヒバリ科		ゴジュウカラ	
カヤクグリ		メジロ科	
ヒタキ科		メジロ	○
ノゴマ		ホオジロ科	
オガワコマドリ		シラガホオジロ	
ルリビタキ	○	ホオジロ	○
ジョウビタキ	○	コジュリン	

ホオアカ	○	シメ	○
コホオアカ		ハタオリドリ科	
カシラダカ	○	ニュウナイスズメ	○
ミヤマホオジロ	○	スズメ	○
ズグロチャキンチョウ		ムクドリ科	
ノジコ	○	コムクドリ	○
アオジ	○	カラムクドリ	
クロジ	○	ホシムクドリ	○
シベリアジュリン		ムクドリ	○
オオジュリン	○	ハッカチョウ	
サバンナシトド		オウチュウ科	
アトリ科		オウチュウ	
アトリ	○	カラス科	
カワラヒワ	○	カケス	○
マヒワ		カササギ	
ベニヒワ		コクマルガラス	○
ベニマシコ		ミヤマガラス	○
ウソ		ハシボソガラス	○
コイカル		ハシブトガラス	○
イカル	○		

現在まで、出水地方で記録されている鳥は、285種である。日本産鳥類約555種の約51%、鹿児島県産鳥類約353種の約80%を占める。また、今年度の観察でも、149種の鳥を見ることができた。この自然環境は、東に矢筈山地、南に紫尾山地、北西に笠山があり、東西に平野が広がっている。北には、八代海、西は、東シナ海の外海になっている。広い干拓地があり、河川も米の津川、高尾野川、野田川、高松川があり鳥類の生息環境が変化に富んでいる。



ムナグロ



ミヤマガラスとコマルクガラス

調査票例

鳥 類 調 査 票

平成 6 年 5 月 12 日 調査者 (溝口文男)

調査地	出水 市町 六月田 米ノ津川				地図番号	1/25,000 米津	
調査方法	定点観察 7:00~8:30				天候	晴れ	
種 名	羽 数	計	種 名	羽 数	計		
キョウジョシギ		20					
キアシシギ		10					
ゴイサギ		8					
コサギ		8					
ムクドリ		7					
スズメ		6					
ヒバリ		4					
アオアシシギ		4					
イワツバメ		4					
キジバト		4					
ハシブトガラス		4					
チュウシャクシギ		4					
セツカ		3					
ソリハシシギ		3					
ツリスガラ		3					
トビ		2					
ホオジロ		2					
ヒクイナ		1					
ハマシギ		1					
オオヨシキリ		1					
合 計	羽数	99	種	20			
摘 要 シギ・チドリ類が見られた。まだツリスガラが残っていた。							

参考文献

- 1) 日本鳥学会 1975: 日本鳥類目録改訂第 5 版 学習研究社
- 2) 鹿児島県 1975: 鹿児島の野鳥
- 3) 山階鳥類研究所標識研究室 1976-1993: 鳥類観測ステーション報告
- 4) 叶内拓也・森岡照明 1977: 荒崎周辺地区の鳥 野鳥42
- 5) 日本鳥類標識協会 1986-1993: 日本鳥類標識協会誌
- 6) 川路則友・安部淳一・高良武信・溝口文男 1987: 鹿児島県鳥類目録 Strix vol 6
- 7) 鹿児島県 1987: 鹿児島県の野鳥
- 8) 安部直哉他 1989: 出水の鶴 ワイス出版
- 9) 千羽普示 1994: 出水のツル 春苑堂出版

(執筆者 溝口文男)

13 川内川の鳥類相

川内川は九州南西部に位置し、流域は鹿児島、宮崎、熊本の三県にまたがっている。鹿児島県内で最大の一級河川であり、流域面積は1,600km²、幹川流路延長は137kmの九州屈指の河川である。

川内川の源は熊本県の白髪岳（標高1417m）に発し、クルソン峠を経て宮崎県西諸県盆地（加久藤平野）を西流し、鹿児島県に入り、吉松狭搾部、湯之尾滝を経て、伊佐盆地で支流羽月川を合流し、曾木の滝から鶴田ダムへ流入し、その後、宮之城狭搾部、川内平野を貫流し、東シナ海へ注いでいる。

川内川は山地部、峡谷状になった狭搾部、ダム湖、平野部と変化に富んだ環境であり、そこを利用する鳥類も地域により多少の差が認められる。鳥類は河川や周辺地を餌場、営巣地、休息地として利用している。

川内川だけに生息するというような固有の鳥類はいない。しかし、上流域の調査が不十分であり、今後源流域を含めた詳細な調査も必要と思える。

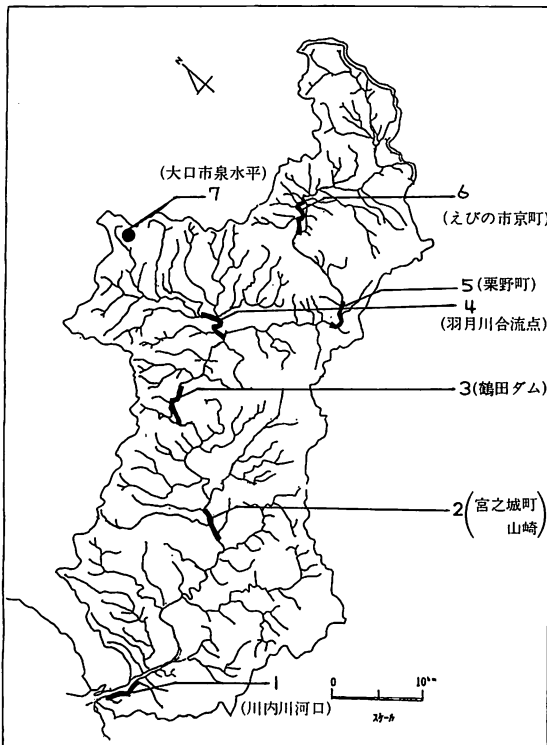
(1) 調査地域と調査方法

今回の調査対象地域は宮崎県のえびの市、鹿児島県の吉松町、栗野町、菱刈町、大口市、薩摩町、鶴田町、宮之城町、樋脇町、東郷町、川内市を貫流する川内川の流域で、図に示した7地域（ステーション）を設定した。1）河口部の高江地区から河口大橋間の流域。2）宮之城町のおしどり橋から山崎大橋間の流域。3）曾木の滝から鶴田ダム（大鶴湖）間。4）大口市の支流羽月川鯉崎橋から本流合流地点までの流域。5）栗野町の北方橋から栗野橋間の流域。6）えびの市京町の真幸橋から鶴丸橋間の流域。7）支流羽月川の源流の一つ大口市布計の泉水平（国見山系）。これらの調査地

に出現する鳥類をロードセンサス法、定点法により確認・記録した。

調査期間および期日は川内川流域は1992年7月27日、28日、10月31日、11月1日、1993年1月28日、29日、3月4日、5日、源流の一つ泉水平は1994年3月4日、12月4日、5日に実施した。これらの調査は個人調査の他に、鹿児島県立博物館「鹿児島の自然調査事業（北薩地区）」、建設省「河川水辺の国勢調査（川内川）」での調査であり、一連の調査結果をまとめたものである。

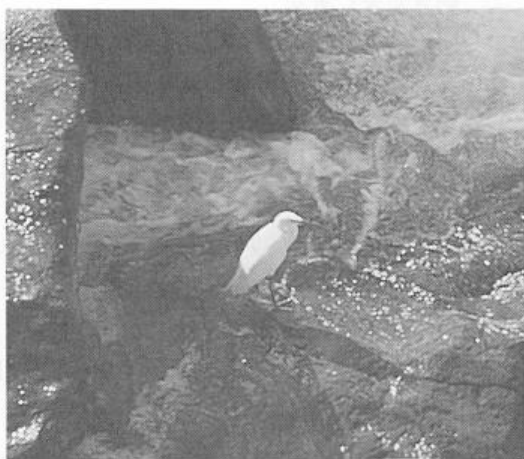
分類および種名の記載は日本鳥学会（1974）「日本鳥類目録」学習研究社によった。



川内川における鳥類の調査地区（ステーション）の配置図



カワウ (川内川河口)



コサギ (曾木ノ滝)



ササゴイ (曾木ノ滝)



イワツバメと巣 (栗野町)



ミヤマガラス (栗野町)



ゴイサギのヒナと巣 (川内川)

(2) 調査結果と考察

今回の調査で確認出来た種は下記の14目34科99種であった。

カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES

カイツブリ科 PODICIPITIDAE

- カイツブリ *Podiceps ruficollis poggei* (Reichenow)
- ハジロカイツブリ *Podiceps nigricollis nigricollis* Brehm
- ミミカイツブリ *Podiceps auritus auritus* (Linnaeus)

ペリカン目 PELECANIFORMES

ウ科 PHALACROCORACIDAE

- カワウ *Phalacrocorax carbo hanedae* Kuroda

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

- ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin)
- ゴイサギ *Nycticorax nycticorax ncticorax* (Linnaeus)
- ササゴイ *Butorides striatus amurensis* (Schrenck)
- アマサギ *Bubulcus ibis coromandus* (Boddaert)
- ダイサギ *Egretta alba* (Linnaeus)
- チュウサギ *Egretta intermedia intermedia* (Wagler)
- コサギ *Egretta garzetta garzetta* (Linnaeus)
- アオサギ *Ardea cinerea jowei* Clark

ガンカモ目 ANSERIFORMES

ガンカモ科 ANATIDAE

- オシドリ *Aix galericulata* (Linnaeus)
- マガモ *Anas platyrhynchos platyrhynchos* Linnaeus
- カルガモ *Anas poecilorhyncha zonorhyncha* Swinhoe
- コガモ *Anas crecca crecca* Linnaeus
- ヒドリガモ *Anas penelope* Linnaeus
- キンクロハジロ *Aythya fuligula* (Linnaeus)

カシタカ目 FALCONIFORMES

カシタカ科 ACCIPITRIDAE

- ミサゴ *Pandion haliaetus haliaetus* (Linnaeus)
- トビ *Milvus migrans lineatus* (J.E. Gray)
- ノスリ *Buteo buteo japonicus* (Temminck & Schlegel)
- サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)
- カラフトワシ *Aquila clanga* Pallas
- ハイイロチュウヒ *Circus cyaneus cyaneus* (Linnaeus)
- チュウヒ *Circus aeruginosus spilonotus* Kaup

ハヤブサ科 FALCONIDAE

- ハヤブサ *Falco peregrinus japonensis* Gmelin
- コチョウゲンボウ *Falco columbarius insignis* (Clark)

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus interstinctus* Horsfield

キジ目 GALLIFORMES

キジ科 PHASIANIDAE

コジュケイ *Bambusicola thoracica thoracica* (Temminck)

キジ *Phasianus colchicus* Linnaeus

ツル目 GRUIFORMES

クイナ科 RALLIDAE

ヒクイナ *Porzana fusca erythrothorax* (Temminck & Schlegel)

バン *Gallinula chloropus indica* Blyth

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRIIDAE

コチドリ *Charadrius dubius curonicus* Gmelin

イカルチドリ *Charadrius placidus japonicus* Mishima

シロチドリ *Charadrius alexandrinus nihonensis* Deignan

タゲリ *Vanellus vanellus* (Linnaeus)

シギ科 SCOLOPACIDAE

クサシギ *Tringa ochropus* Linnaeus

キアシシギ *Tringa brevipes* (Vieillot)

イソシギ *Tringa hypoleucos* Linnaeus

カモメ科 LARIDAE

セグロカモメ *Larus argentatus vegae* Palmen

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

キジバト *Streptopelia orientalis orientalis* (Latham)

アオバト *Sphenurus sieboldii sieboldii* (Temminck)

ドバト *Columba livia var. domestica* (Linnaeus)

ホトトギス目 CUCULIFORMES

ホトトギス科 CUCULIDAE

ホトトギス *Cuculus poliocephalus poliocephalus* Latham

アマツバメ目 APODIFORMES

アマツバメ科 APODIDAE

ヒメアマツバメ *Apus affinis subfurcatus* (Blyth)

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

ヤマセミ *Ceryle lugubris lugubris* (Temminck)

カワセミ *Alcedo atthis bengalensis* Gmelin

キツツキ目 PICIFORMES

キツツキ科 PICIDAE

アオゲラ *Picus awokera* Temminck

オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* (Bechstein)

- コゲラ *Dendrocopos kizuki* (Temminck)
- スズメ目 PASSERIFORMES
- ヒバリ科 ALAUDIDAE
- ヒメコウテンシ *Calandrella cinerea* (Gmelin)
- ヒバリ *Alauda aruensis japonica* Temminck & Schlegel
- ツバメ科 HIRUNDINIDAE
- ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* Scopoli
- イワツバメ *Delichon urbica dasyptus* (Bonaparte)
- セキレイ科 MOTACILLIDAE
- キセキレイ *Motacilla cinerea robusta* (Brehm)
- ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* Gloger
- セグロセキレイ *Motacilla grandis* Sharpe
- ビンズイ *Anthus hodgsoni hodgsoni* Richmond
- タヒバリ *Anthus spinoletta japonicus* Temminck & Schlegel
- サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE
- サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles)
- ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE
- ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis* (Temminck)
- モズ科 LANIIDAE
- モズ *Lanius bucephalus bucephalus* Temminck & Schlegel
- カワガラス科 CINCLIDAE
- カワガラス *Cinclus pallasii pallasii* Temminck
- ミソサザイ科 TROGLODYTIDAE
- ミソサザイ *Troglodytes troglodytes fumigatus* Temminck
- ヒタキ科 MUSCICAPIDAE
- ルリヒタキ *Tarsiger cyanurus cyanurus* (Pallas)
- ジョウヒタキ *Phoenicurus auroreus auroreus* (Pallas)
- イソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis* (Müller)
- シロハラ *Turdus pallidus* Gmelin
- ツグミ *Turdus naumanni eunomus* Temminck
- ウグイス *Cettia diphone cantans* (Temminck & Schlegel)
- オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus orientalis* (Temminck & Schlegel)
- キクイタダキ *Regulus regulus japonensis* Blakiston
- セッカ *Cisticola juncidis brunniceps* (Temminck & Schlegel)
- エナガ科 AEGITHALIDAE
- エナガ *Aegithalos caudatus trivirgatus* (Temminck & Schlegel)
- ツリスガラ科 REMIZIDAE
- ツリスガラ *Remiz pendulinus consobrinus* (Swinhoe)
- シジュウカラ科 PARIDAE
- コガラ *Parus montanus restrictus* Hellmayr

- ヒガラ *Parus ater insularis* Hellmayr
 ヤマガラ *Parus varius varius* Temminck & Schlegel
 シジュウカラ *Parus major minor* Temminck & Schlegel
 メジロ科 ZOSTEROPIDAE
 メジロ *Zosterops japonica japonica* Temminck & Schlegel
 ホオジロ科 EMBERIZIDAE
 ホオジロ *Emberiza cioides ciopsis* Bonaparte
 ホオアカ *Emberiza fucata fucata* Pallas
 カシラダカ *Emberiza rustica latifascia* Portenko
 ミヤマホオジロ *Emberiza eregans elegans* Temminck
 アオジ *Emberiza spodocephala personata* Temminck
 アトリ科 FRINGILLIDAE
 アトリ *Fringi montifringilla* Linnaeus
 カワラヒワ *Carduelis sinica* (Linnaeus)
 マヒワ *Carduelis spinus* (Linnaeus)
 ウソ *Pyrrhula pyrrhula* (Linnaeus)
 イカル *Eophona personata personata* (Temminck & Schlegel)
 シメ *Coccothraustes coccothraustes japonicus* Temminck & Schlegel
 ハタオリドリ科 PLOCEIDAE
 ニュウナイスズメ *Passer rutilans rutilans* (Temminck)
 スズメ *Passer montanus saturatus* Stejneger
 ムクドリ科 STURNIDAE
 ムクドリ *Sturnus cineraceus* Temminck
 カラス科 CORVIDAE
 カケス *Garrulus glandarius* (Linnaeus)
 コクマルガラス *Corvus monedula dauuricus* Pallas
 ミヤマガラス *Corvus frugilegus pastinator* Gould
 ハシボソガラス *Corvus corone orientalis* Eversmann
 ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos japonensis* Bonaparte

これまでの既存文献の中で川内川の河川のみに限ったものはないが、周辺地域の北薩地方の調査例での出現種と今回確認された種と照らし合わせて著者なりに考察してみた。

川内川における各ステーション別の鳥種の出現状況は表の通りである。鳥類分類に従い、各目別に概略を述べる。

カイツブリ目のカイツブリは川内川の全ステーション（源流は除く）で確認され、ごく一般的な留鳥である。冬期の調査で冬鳥のハジロカイツブリが鶴田ダム湖で、ミミカイツブリが栗野・京町の河川で確認された。

ペリカン目のカワウは秋期、冬期、春季において河口から鶴田ダムの上流、曾木ノ滝、更に羽月川との合流点の付近まで観られ、栗野から上流では観られなかった。

鳥類のステーション別の出現状況

動物名			ステーション No.						
目	科	種	1	2	3	4	5	6	7
カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ ハジロカイツブリ ミミカイツブリ	*	*	*	*	*	*	*
ペリカン	ウ	カワウ	*	*	*	*			
コウノトリ	サギ	ヨシゴイ ゴイサギ ササゴイ アマサギ ダイサギ チュウサギ コサギ アオサギ	*	*	*	*	*	*	*
ガンカモ	ガンカモ	オシドリ マガモ カルガモ コガモ ヒドリガモ キンクロハジロ	*	*	*	*	*	*	*
ワシタカ	ワシタカ	ミサゴ トビ ノスリ サシバ カラフトワシ ハイロチュウヒ チュウヒ	*	*	*	*	*	*	*
	ハヤブサ	ハヤブサ コチョウゲンボウ チョウゲンボウ	*			*	*	*	*
キジ	キジ	コジュケイ キジ	*	*	*	*	*	*	*
ツル	クイナ	ヒクイナ バン				*	*	*	*
チドリ	チドリ	コチドリ イカルチドリ シロチドリ タゲリ		*		*	*	*	*
	シギ	クサシギ キアシシギ イソシギ	*	*		*	*	*	*
	カモメ	セグロカモメ	*						
ハト	ハト	キジバト アオバト ドバト	*	*	*	*	*	*	*
ホトトギス	ホトトギス	ホトトギス		*	*		*		
アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ					*	*	
ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ カワセミ	*	*	*	*	*	*	*
キツツキ	キツツキ	アオゲラ オオアカゲラ コゲラ	*	*	*	*			*

動物名			ステーション No.							
目	科	種	1	2	3	4	5	6	7	
スズメ	ヒバリ	ヒメコウテンシ ヒバリ	*	*	*	*	*	*		
	ツバメ	ツバメ イワツバメ		*	*	*	*	*		
	セキレイ	キセキレイ ハクセキレイ セグロセキレイ ピンズイ タヒバリ	*	*	*	*	*	*	*	
	サンショウクイ	サンショウクイ		*	*					
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	*	*	*	*	*	*	*	
	モズ	モズ	*	*		*	*	*	*	
	カワガラス	カワガラス		*	*		*			
	ミソサザイ	ミソサザイ		*	*					
	ヒタキ	ルリヒタキ ジョウヒタキ イソヒヨドリ シロハラ ツグミ ウグイス オオヨシキリ ククイタダキ セッカ	*	*	*	*	*	*	*	
	エナガ	エナガ	*	*	*	*			*	
	ツリスガラ	ツリスガラ	*		*					
	シジュウカラ	コガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ	*	*	*	*	*		*	
	メジロ	メジロ	*	*	*	*	*	*	*	
	ホオジロ	ホオジロ ホオアカ カシラダカ ミヤマホオジロ アオジ	*	*	*	*	*	*	*	
	アトリ	アトリ カワラヒワ マヒワ ウソ イカル シメ	*	*	*	*	*	*	*	
	ハタオリドリ	ニューナイスズメ スズメ	*	*		*	*	*		
	ムクドリ	ムクドリ	*	*		*	*	*		
	カラス	カケス コクマルガラス ミヤマガラス ハシボソガラス ハシブトガラス	*	*	*	*	*	*	*	
	14	34	99	51	56	51	56	54	50	24

コウノトリ目では周年観察された種はゴイサギ、コサギ、アオサギで、他のヨシゴイ、ササゴイ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギは夏期の観察である。サギ類の規模の大きい集団営巣地が川内川の下流域の東郷橋～倉野橋の間の河川敷内の湿地にみられる。

ガンカモ目ではカルガモの少数が下流域 (St. 1, 2) で夏期もみられるが、他のカモ類は秋期から春期にかけての観察で渡り鳥 (冬鳥) である。オシドリは栗野 (St. 5) で、キンクロハジロは宮之城 (St. 2) で確認できた。川内川の全ステーション (源流は除く) で最も多く一般的なカモ類はマガモ、カルガモ、ヒドリガモである。カルガモは留鳥とされているが、鹿児島県内で夏期にみられる本種はごく一部であり、殆どが他の冬鳥と同様渡って行く。

ワシタカ目ではトビは周年・全ステーション (源流は除く) で確認され、ごく一般的な留鳥である。ミサゴ、ノスリ、チュウヒ、ハヤブサは河口部 (St. 1) で、ハイイロチュウヒ、サシバ、ノスリ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウは上流域 (St. 4, 5, 6) で観察されている。

キジ目ではコジュケイが周年・全ステーション (源流は除く) で確認され、ごく一般的な留鳥である。キジは周年であるが上流域 (St. 5, 6) で観察されている。

ツル目ではバンが上流域 (St. 4, 5, 6) で周年観察されている。ヒクイナは上流域 (St. 5, 6) で冬期と春期の観察である。

チドリ目ではイソシギが周年・全ステーション (源流は除く) で確認され、ごく一般的な留鳥である。その他のシギ・チドリ類は一般的でない。

ハト目ではキジバトが周年・全ステーション (源流は除く) で確認され、ごく一般的な留鳥である。ドバトは野生種ではないが一般的鳥である。アオバトは鶴田ダムで秋期の確認である。

ホトトギス目ではホトトギスが St. 2, 3, 4 で夏期と春期の確認である。

アマツバメ目のヒメアマツバメは上流域 (St. 5, 6) で春期の観察である。

ブッポウソウ目のヤマセミ、カワセミは周年・全ステーション (源流は除く) で確認され、ごく一般的な留鳥である。

キツツキ目のコゲラは周年・林が迫っている河川では確認され、ごく一般的な留鳥である。オオアカゲラは鶴田ダムと源流域の泉水平で (St. 7) で観察され、アオゲラは宮之城 (St. 2) と鶴田ダム (St. 3) の観察である。オオアカゲラならびにアオゲラの生息場所は何れも深い森林地帯であった。

スズメ目ではヒバリ、キセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、セッカ、エナガ、コガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシブトガラスそしてハシボソガラスは周年・ほとんどのステーションで確認され、ごく一般的な留鳥である。ヒメコウテンシ、ハクセキレイ、ピンズイ、タヒバリ、ミソサザイ、ルリビタキ、ジョウビタキ、ツグミ、シロハラ、キクイタダキ、ツリスガラ、ホオアカ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、アオジ、アトリ、マヒワ、ウソ、イカル、シメ、ニューナイスズメ、コクマルガラス、ミヤマガラスは秋期から春期までの確認であり渡り鳥 (冬鳥) の部類に入る。一方、ツバメ、サンショウクイは春期から夏期にかけてみられる渡り鳥 (夏鳥) の部類に入る。カワガラスは留鳥であり、中流 (St. 2, 3, 5) の確認であるがこれらのステーションの環境は何れも瀬になっており、岩の間を水の流れる、溪流的な環境であった。

(執筆者 鮫島正道)

14 下甌島の両生類・爬虫類相

甌島は薩摩半島の西方約20kmの海上にあり、上甌島、平島、下甌島と北東から南西に長く連なり、延長38km、面積は105km²に達する。島の地形の概要は、平地はほとんどなく海岸線の大部分は断崖で、特に北西部の海岸は急な断崖で海に接している。

下甌島は3島の中で最も大きく地形も複雑であり、島の背骨ともなる山岳は尾岳(604m)を最高に青潮岳、小田山、瀬尾山などがある。西海岸は殆ど断崖であるが、東岸は長浜、青瀬、手打には砂浜が発達している。気候は暖流の影響で暖かく、佐多岬、屋久島の一湊と同じで霜を見ることはないといわれている。

甌島における基本的な両生類・爬虫類相は九州本土とほぼ一致すると思えるが、島嶼であるため種も少なくそれなりの特性もあると思われる。甌島の両生類・爬虫類相についての詳細な調査は少ない。今回、1994.10.30から11.1までの3日間にわたり両生類・爬虫類観察と聞き取り調査の機会を得た。短期間で一人による調査記録であり、出現種の数に限界があった。ここでは3日間の島内の耕作地、森林内、林道における目撃法・見つけ取り法により出現する両生類・爬虫類を確認・記録した。

調査時に出現した種(*)と聞き取りにより確認した種の両生類・爬虫類目録
両生綱 AMPHIBIA

カエル目 SALIENTIA

ヒキガエル亜目 ARCIFERA

ヒキガエル科 BUFONIDAE

ヒキガエル *Bufo bufo japonicus* Schlegel, 1838

アマガエル科 HYLIDAE

*アマガエル *Hyla arborea japonica* Günther, 1858

アカガエル亜目 FIRMISTERNIA

アカガエル科 RANIDAE

ニホンアカガエル *Rana (Rana) japonica japonica* Günther, 1858

*ヌマガエル *Rana (Rana) limnocharis limnocharis* Wiegmann, 1835

爬虫綱 REPTILIA

カメ目 TESTUDINATA

ウミガメ科 CHELONIIDAE

アカウミガメ *Caretta caretta gigas* Deraniyagala, 1933

トカゲ目 SQUAMATA

トカゲ亜目 LACERTILIA

ヤモリ科 GEKKONIDAE

ヤモリ *Gekko japonicus* (Dumeril et Bibron, 1836)

トカゲ科 SCINCIDAE

トカゲ *Eumeces latiscutatus* (Hallowell, 1860)

カナヘビ科 LACERTIDAE

*カナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)

へび亜目 OPHIDIA

へび科 COLUBRIDAE

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)

ジムグリ *Elaphe conspicillata* (Boie, 1826)

*アオダイショウ *Elaphe climacophora* (Boie, 1826)

*ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus tigrinus* (Boie, 1826)

クサリへび科 VIPERIDAE

マムシ *Agkistrodon halys* (Pallas, 1776)

今回の調査で確認した両生類はアマガエルとヌマガエル、爬虫類のカナヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシと少なかった。目撃ならびに採集した種と場所は図に示した。本調査は10月30日から11月1までの晩秋ということもあり、両生類・爬虫類調査には適さない時期とも思える。また、聞き取り調査から推察して、ヒキガエルとマムシの多い島と思える。

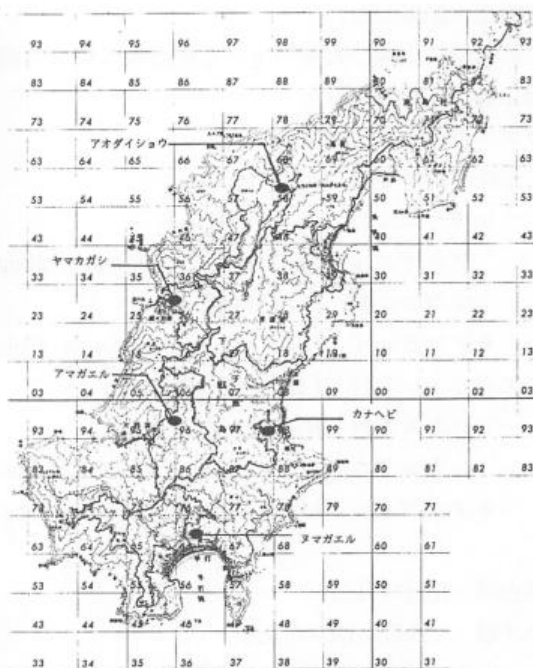


ヤマカガシ



ヒキガエル

(酒匂 猛 撮影)



下甕島における両生類・爬虫類の採集場所

(執筆者 鮫島正道)

15 川内川の両生類・爬虫類相

川内川は九州西南部に位置し、流域は鹿児島、宮崎、熊本の三県にまたがっている鹿児島県内で最大の一級河川であり、流域面積は1,600km²、幹流路延長は137kmの九州屈指の河川である。

川内川の源は熊本県の白髪岳（標高1417m）に発し、クルソン峠を経て宮崎県西諸県盆地（加久藤平野）を西流し、鹿児島県側へ入り、吉松狭搾部、湯之尾滝を経て、伊佐盆地で支流羽月川を合流し、曾木の滝から鶴田ダムへ流入し、その後、宮之城狭搾部、川内平野を貫流し、東シナ海へ注いでいる。

川内川は山地部、峡谷状になった狭搾部、ダム湖、平野部と変化に富んだ環境であり、出現する両生類・爬虫類にも地域により多少の差が認められる。両生類・爬虫類はそれぞれの習性から森林、平野部や耕作地、湖沼、河川などの環境を選び、それに適応しながら生きている。

川内川だけに生息するというような固有の両生類・爬虫類はいない。しかし、上流域の国見山系にはベッコウサンショウウオやブチサンショウウオの生息地がある。

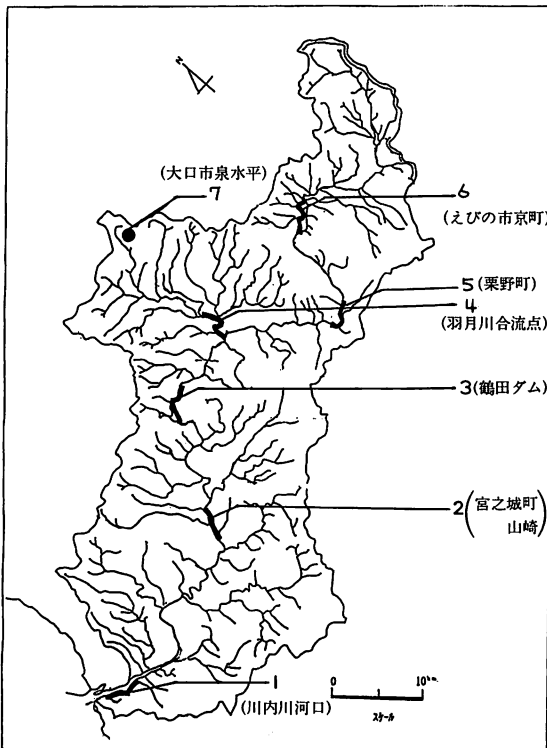
(1) 調査地域と調査方法

今回の調査対象地域は宮崎県のえびの市、鹿児島県の吉松町、栗野町、菱刈町、大口市、薩摩町、鶴田町、宮之城町、樋脇町、東郷町、川内市を貫流する川内川の流域で、図に示した7地域を設定した。1) 河口部の高江地区から河口大橋間の流域。2) 宮之城町のおしどり橋から山崎大橋間の流域。3) 曾木の滝から鶴田ダム（大鶴湖）間。4) 大口市の支流羽月川鯉崎橋から本

流合流地点までの流域。5) 栗野町の北方橋から栗野橋間の流域。6) えびの市京町の真幸橋から鶴丸橋間の流域。7) 支流羽月川の源流の一つ大口市布計の泉水平（国見山系）。これらの調査地を目撃法・見つけ取り法により出現する両生類・爬虫類を確認・記録した。

調査期間および期日は川内川流域は1991年夏期8月27日～9月2日、同年秋期10月30日～11月3日、1992年冬期2月9日～2月12日、同年秋期11月5日～11月6日、源流の一つ泉水平はサンショウウオ調査を目的に春季1988年3月10日、1989年3月15日、1992年3月11日、1994年3月4日、同年冬期12月10、11日に実施した。これらの調査は個人調査の他に、鹿児島県立博物館 鹿児島自然調査事業（北薩地区）、建設省河川水辺の国勢調査（川内川）での調査であり、一連の調査結果をまとめたものである。

分類および種名の記載については中村健次・上野俊一（1963）「原色日本両生爬虫類図鑑」保育社に準じた。



川内川における両生類・爬虫類調査の調査地区（ステーション）の配置図

(2) 調査結果と考察

今回の調査で確認できた種は下記の通りである。

両生綱 AMPHIBIA

サンショウウオ目 CAUDATA

サンショウウオ科 HYNOBIIDAE

ベッコウサンショウウオ *Hynobius (Hynobius) stejnegeri* Dunn, 1923

イモリ科 SALAMANDRIDAE

イモリ *Triturus (Cynops) pyrrhogaster pyrrhogaster* (Boil, 1826)

カエル目 SALIENTIA

ヒキガエル科 BUFONIDAE

ヒキガエル *Bufo bufo japonicus* Schlegel, 1838

アマガエル科 HYLIDAE

アマガエル *Hyla arborea japonica* Gunther, 1858*

アカガエル科 RANIDAE

ニホンアカガエル *Rana (Rana) japonica japonica* Günther, 1858

トノサマガエル *Rana (Rana) nigromaculata* Hallowell, 1860

ウシガエル *Rana (Rana) catesbeiana* Shaw, 1802

ツチガエル *Rana (Rana) rugosa* Schlegel, 1838

ヌマガエル *Rana (Rana) limnocharis limnocharis* Wiegmann, 1835

アオガエル科 RHACOPHORIDAE

シュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)

カジカガエル *Rhacophorus buergeri* (Schlegel, 1838)

爬虫綱 REPTILIA

カメ目 TESTUDINATA

カメ科 TESTUDINIDAE

イシガメ *Clemmys japonica* (Temminck et Schlegel, 1835)

スッポン科 TRIONYCHIDAE

スッポン *Trionyx sinensis japonicus* Temminck et Schlegel, 1835

トカゲ目 SQUAMATA

ヤモリ科 GEKKONIDAE

ヤモリ *Gekko japonicus* (Duméril et Bibron, 1836)

トカゲ科 SCINCIDAE

トカゲ *Eumeces latiscutatus* (Hallowell, 1860)

カナヘビ科 LACERTIDAE

カナヘビ *Takydromus tachydromoides* (Schlegel, 1838)

ヘビ科 COLUBRIDAE

タカチホヘビ *Achalinus (Achalinus) spinalis* Peters, 1869

シマヘビ *Elaphe quadrivirgata* (Boie, 1826)

ジムグリ *Elaphe conspicillata* (Boie, 1826)

アオダイショウ *Elaphe climacophora* (Boie, 1826)

ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus tigrinus* (Boie, 1826)

クサリヘビ科 VIPERIDAE

マムシ *Agkistrodon halys* (Pallas, 1776)

川内川の両生類・爬虫類のステーション別の出現状況

動物名			ステーション No.							
目	科	種	1	2	3	4	5	6	7	
サンショウウオ	サンショウウオ	ベッコウサンショウウオ							*	
	イモリ	イモリ			*					
カエル	ヒキガエル	ヒキガエル		*	*	*	*	*		
	アマガエル	アマガエル	*	*	*	*	*	*	*	
	アカガエル	ニホンアカガエル				*				*
		トノサマガエル				*	*	*	*	
		ウシガエル				*	*			
		ツチガエル				*	*			
ヌマガエル		*	*	*	*	*	*			
アオガエル	シュレーゲルアオガエル カシカガエル		*	*	*	*	*	*		
カメ	カメ	イシガメ	*	*	*	*	*	*		
	スッポン	スッポン	*	*	*	*	*	*		
トカゲ	ヤモリ	ヤモリ			*	*	*			
	トカゲ	トカゲ	*	*	*	*	*	*		
	カナヘビ	カナヘビ	*	*	*	*	*	*		
	ヘビ	タカチホヘビ				*				
		シマヘビ		*	*	*	*	*	*	
		ジムグリ						*		
		アオダイショウ		*	*	*	*	*	*	
ヒバカリ				*						
ヤマカガシ		*	*	*	*	*	*			
クサリヘビ	マムシ		*	*						
4	13	23	10	12	21	15	14	12	3	

これまでの既存文献の中で川内川の河川のみに限ったものはないが、周辺地域の北薩地方の調査例での出現種と今回確認された種について著者なりに考察してみた。

サンショウウオ目サンショウウオ科の生息状況について、川内川支流羽月川の源流の一つ大口市布計の泉水平（国見山系）付近には文献によればベッコウサンショウウオとブチサンショウウオが生息しているとの報告があるが、1994年3月4日の泉水平での調査では源流の湧水地（水温12℃）で幼生のベッコウサンショウウオ25個体採集し、計測後再放流した。この中にはブチサンショウウオは含まれていなかった。1994年12月10日に同地の湧水地（水温12℃）で幼生のベッコウサンショウウオ25個体を採集し計測後再放流した。今後とも時期を変え詳細な調査が必要と思う。

サンショウウオ目イモリ科のイモリは鶴田ダムで確認されたが、他の調査地において今回は確認していないが生息は一般的と思える。

カエル目アカガエル科のタゴガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエルの生息が考えられるが今回の調査ではアカガエル類のなかではニホンアカガエルのみの出現であった。これら3種は類似しており、同定に注意を払って今後の生息確認調査を進めたい。他のカエルのヒキガエル、アマガエル、トノサマガエル、ウシガエル、ツチガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエルについては今回の調査で確認できた。

カメ目カメ科のクサガメ、イシガメ、スッポン科のスッポンの生息が文献ではあるが、今回の調査ではイシガメ、スッポンは確認できたがクサガメは確認されなかった。鹿児島県内の主要河川ではイシガメは一般的であるがクサガメがどの程度の割合で生息するか詳細な記録がない。今後、正確な把握が必要と思える。

トカゲ目のヤモリ科ヤモリ、トカゲ科トカゲ、カナヘビ科カナヘビ、ヘビ科タカチホヘビ、シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシが確認できた。タカチホヘビ、ヒバカリは一般的なヘビではない。タカチホヘビは鶴田ダムサイド路上での轢死体の確認であり、偶然性が強い、またヒバカリは目に触れる機会が少ないことが考えられる。河川敷で最も一般的なヘビはシマヘビであるが、黒化型もかなり多く見られた。

川内川の両生類・爬虫類のステーション別の出現状況は、あくまでも調査時に確認できたものであり、確認出来なかったものはそのステーションに生息しないということにはならない。今後さらに詳細な調査を重ねることで、プラス分布、マイナス分布がはっきりしてくるものと思う。



ヌマガエル（栗野町）



ジムグリ

（執筆者 鮫島正道）